

序

学長 斎藤 秀 晃

いつの間にか年報7号発刊の運びとなった。本学における年間行事は毎年同じように繰り返されているように見えるが、新しい入学生とともに進歩を重ねているのだと思う。

本年は遅ればせながら、本学の自己点検・評価を纏めて世に送り、ご批判を乞うことにしたが、この委員会の16回に及ぶ審議によっても、未だ充分とはいえないことに忸怩たるものがある。ただ委員会メンバーのご努力に謝意を表したい。私どもの念頭にあるのは、学生に対する教育は万全であったか、例えば教授方法、学内実習・臨床実習の工夫、図書の実用などの問いかけに答えられたらどうかという反省と今後の指針を提示できたであろうかという悩みは続いている。

一方、設置者である新潟県は本学の四年制化を決定し、平成14年度開学を目指して準備を進め、4月には文部科学省に設置認可申請を行ったところである。3年制の看護婦養成や国家試験などは、昭和20年代に米国の指導により発足したもので、看護職の資質の向上と社会的地位としての専門職の位置づけと、その自覚を促した。しかし、その後50年を経た現在、医療も社会も大きく変わり、世界の先進国として位置づけられるようになって、看護職にとっても当然高度な知識レベルが要求された。グローバル化の中で看護大学は必然的に設立されたものと思う。

本学における教員は、学生達に看護職に必要な学問の土台を作ると共に、人間として、社会人としての教養を持たせるよう一層の努力をしていただきたい。更に教員自身が専門の学者というだけでなく、自己を謙虚に見つめて研究心を煽り、人間的にも成長していただきたいと思う。

このことは大学の管理者である学長にとっても同じである。近年の経済的、社会的な消耗の影響は大学運営にもかぶさってきていて、早く今後の対策を教職員と共に構築したいと思っている。

目を転ずれば、本学のある上越市は自然に恵まれた小都市である。このような環境の中でゆっくり勉強できたら最高である。

世界的脳外科の権威でもあり、俳人としても有名な故中田瑞穂先生（新潟大学名誉教授）の一句を記して擲筆する。

…… 学問の 静かに雪の 降るは好き
みづほ ……